

2021/8/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報八月号 サバイバルキャンプ

目次

- ・天道と人道
- ・サバイバルキャンプ
- ・準備
- ・山に入る
- ・知恵と工夫と意志
- ・山から出る

①天道と人道

自然には生成発展の流れを生み出す厳格な秩序があり、造化は止まらない。

この造化という天意天理の已むことのないはたらきを「天道」と言う。つまり、天道とは自然の摂理であり営みである。天道によって万物は生成化育する。

一方人間は、自然の摂理とは別に、知恵と工夫をこらして自らの意志を貫くことができる。意志によって為すことを「人為」という。人が天道に手を加えたという原因が継続している限りにおいては、天道より人為が優先される。但し、人為が限度を超えれば「極まれれば反転する」という大自然の摂理がはたらき、天理へと飲み込まれていく。つまり、天理天道天意を根底として万物は生成化育するが、そこに人為が働けばそれが優先され、物事を開闢し変化させていく。これを「人道」と呼ぶ。

天道（自然）を根底とし、人道（人為）を修め、各々の性に順って己の道を歩む。その道標となるのが「教え」である。

②サバイバルキャンプ

人里離れた山に入って週末を過ごすことをイメージして読んでみて欲しい。勘違いしないでほしいが、これはキャンプやピクニックではない。だから、「新しいテントと寝袋買ったんだ。それに焚き火台も。新しいダッチオーブンで何でも美味しくできる。あれも便利、これも使うかも」等とは考えない。サバイバルキャンプはそういう趣旨ではない。日頃の便利さにかまけて鈍ってしまった人間の一番の武器である「知恵と工夫と意志」を取り戻して自力で生き抜くことが目的だ。だから、身体一つで行くというのが理想だが、水の確保や野生動物との遭遇等、山の中には様々なリスクがあるから、「知恵と工夫と意志」を引き出す最低限の準備を、春夏秋冬に応じて行う。

③ 準備

まず、部屋で地図を開こう。スマホやパソコンでもいい。サバイバルは人里離れた場所で行う。インスタ映えなんて考える必要はない。道路脇から山に入り、5キロ程歩いたところに川があるような場所。そこを拠点にして二泊。食べ物や寝床も現地調達。持ち物は最小限に。必要なものは、身近にある自然を利用して自分の「知恵と工夫と意志」で用意する。

では、持ち物をいくつかリストアップしてみる。「安全・暖・救助・水・食料」を踏まえて準備する。要らないと感じるものは用意しなくていい。

◎水（水筒）：携帯用浄水器がついていると便利

◎ナイフ、鉋、ライター、腕時計、コンパス、パラコード

◎消毒薬、絆創膏、ワセリン、包帯（三角巾）、塩、歯ブラシ

◎軍手、手ぬぐい

◎スマホ、モバイルバッテリー

あとは、自然の中にあるもの、身近なもので工夫する。その方がゴミも出ない。これくらいの荷物ならリュックも不要かもしれない。水は水筒に入れて肩から掛けるか腰に着け、手ぬぐいは頭に巻いておけばよい。

④ 山に入る。

街中のアスファルトの道路なら時速五キロ程度で歩けるが、山や森の中を歩くのはその半分以上のスピードになることもある。そして疲れは何倍にもなる。それを避けるには、山や森に入ったら**自然に逆らわずに状況と環境に適応しながらリズムを**もって移動すること。自分をこの山の一部と考える。山との一体感を持つ。朝、山に入ったら昼頃までには水の音を聞くことができるだろう。山や森の中では、川の近くを拠点とする。人間の文明はいつでも川の近くで起こったことを思い出せ。

拠点を決めたら、河原の石などでかまどを作って木を集めたら、まずは川に沿って歩いてみる。食料探しである。カエルは焼いてしまえば骨ごと喰える。バッタ（イナゴ）等昆虫は焼き鳥のように串に刺して丸焼きにして喰える。そして、昆虫は牛や豚や魚よりも栄養価が高い。つまり、少量でも喰っていれば相当生きられるということだ。大自然が提供してくれるサブリダと思えばいい。味はエビ。ただ、甲殻類（蟹やエビ）アレルギーの人は厳しい。

アオダイショウ、ヤマカガシ（毒蛇）、シマヘビ、マムシ（毒蛇）……。蛇はマムシが一番美味しい。蛇をおびき寄せるには、鳥の羽を焼く。それがなければ、人間の髪の毛を焼いても良い。捕まえたら頭を切り落とす。蛇は生命力が強く、頭を切り落としても一時間くらいは生きている。胴体は手に巻き付くこともあるが問題ない。切り落とした頭の方に噛まれないように気を付ける。動いているのが嫌なら、振り回して頭部を木に叩きつけてから頭を切り落とす。

切り取ったところから縦に切れ目を入れて胴体の皮を剥ぐ。寄生虫もいるだろうから内臓も取り除いてから一時間程じっくり焼く。生き血を飲みたいと思う人もいるだろうが、寄生虫の卵が誤って入ることもあるからお勧めはしない。「蛇なんか絶対に喰えない」という人もいる。小骨が多いけど、味は白身魚のような鳥のササミのような感じだ。

一服したい時は、**松葉茶**。松のあの尖った葉は見分けがつきやすいし、松の木は大体の山にある。葉の根元の茶色い所を取り除けば、苦味も抑えられる。松の葉を煮出してお茶として飲む。ビタミン、ミネラル、カルシウム等を含み、冷え性にも効くし血管も強くする。食料が何も取れなくても、松葉茶さえ飲んでいけばしばらく生きていられる。

どの野草なら食べられるか知識が乏しければどうするか。**パッチテスト**を試みる。食べてみようという植物の部位（葉、茎、根）を肘の内側に数分挟んで体に尋ねる。パッチテストをクリアしたら、少量をゆっくり口に含んで味と臭いを体に尋ねる。特に、舌に痺れを感じるような刺激の強いものは食べてはダメだ。要は、自分の体の実感、五感を研ぎ澄ませてそれを信じるということ。

さて、山や森の夜は非常に早い。空は明るくても森の中は暗くなる。だから、街にいる時とは数時間、時間の感覚がズレると思った方がよい。夜は動かない方がいい。夜の山や森は穏やかではないのだ。野生動物は生き物であるから、「ここには絶対にいない」とは言い切れない。今、真後ろにいても不思議ではないのだ。熊、猪、鹿、野犬、山猫、蛇……。そして地形上の意外な危険もあちこちにある。だから、なるべく朝まで火を消さないようにする。朝が来るまで寝床にいる方が安全なのだ。夜、天気が良いければ綺麗な星空に出会うこともできる。

⑤ 知恵と工夫と意志

自然の中に身を投げ込んでみると、人間の生き死にが身近に感じられるようになって、自然や命の仕組み、道理、秩序が分かってくる。力を抜くときは抜く。入れるときは必要なだけ入れる。

生きるといふことは、動植物という他者の命を殺して頂くこと。それが自然の摂理。自分が生きるには、何かを殺さなければならぬことが実感できると、食べ物に対しては、それがどんなに加工してあって元の姿が分からなくなっているとしても、感謝と謙虚さと、自分が生きるといふ覚悟が湧き出てくる。**先入観なし**に食べると、いろんなものが喰えるようになる。動物とは思わず、生きるための栄養源だと思えば意外と喰えるものだ。

喰うため、生き抜くためには、野生動物と立ち合うこともある。そして、野生動物を相手に立ち合えるならば、都市で生活している人間を相手にすることは難しくない。ただ、心が弱く精神が繊細な人が多いから、逆に相手をより気遣うことがあるかもしれない。

れないが。とにかく、山で経験することは街での生活に応用できることが多い。逆に、街で通用することは山では通用しないことが多い。

さて、野生動物というのは、いったん攻撃すると無抵抗な相手には執拗に攻撃する。だから無抵抗というのはお勧めしない。

例えば熊。

日本にいる熊はヒグマとツキノワグマ。ヒグマは北海道にいる。が、熊は泳ぐのが上手い動物なので秋田や青森にいても不思議はない。一方、ツキノワグマは本州どこにでもいると思っておいた方がよい。テディベアや、くまのプーさんを思い浮かべる人もいるだろうが、ここで話しているのは、実際に生息している猛獣だ。熊は冬の間は冬眠し、春から秋にかけて朝夕活発に動く。

熊の痕跡（足跡や木の幹に引っ掻いたり噛んだりした跡）があれば、安全を選択して下山するのが良い。が、今回は逃げるといふ選択は取らない。

熊に遭遇して逃げられないと分かったら：、死んだフリ？それでは襲われて本当に死んでしまう。背を向けて逃げる？それでは背後から襲われる。熊は時速四〇キロで走る。走って逃げられると思わない方がよい。火は有効だが、ライター程度では熊は全く怯まない。もしもリュックや帽子を取られてしまったら、取り戻そうとしてはいけない。熊はより攻撃的になって取り返しに来る。「俺が熊に取られた自分のものを取り返すのは当然だ。熊の態度は理不尽だから認められない」と思うのは自由だが、熊はそうは思わない。取られたら取り戻す。それが熊の習性なのだ。

しかし、タダで渡してしまうのはよくない。そんな態度を取ると、熊は人間をなめてかかる。人間は恐ろしいものだということを熊に教えておかないと、別の人間も襲うようになり、人間を恐れない熊が出来上がってしまう。たまに人間を恐れない熊がいるのはそういうわけだ。人間をなめるような熊には、痛い思いをさせて人間の恐ろしさを植え付けておかなくてはならない。それがお互いのためなのだ。

熊の攻撃で多いのは、突進してきて力任せに覆いかぶさり、爪を武器に振り回したり、噛みついたりする。力では人間は敵わない。しかし、人間の方が賢いということ熊は知らない。

逃げられない状況なので戦うと決めたら、知恵と工夫と意志（度胸）の見せどころである。死んだふりと背中を見せることはダメ。絶対に怯まないこと。気力、気持ちで負けたら絶対にダメだ。どうするか。自分をデカく見せて大声を出して威嚇する。こちらが熊を威嚇しなければならぬ。近くの木の幹を蹴っ飛ばして枝葉を揺らしたりして、とにかく自分を熊よりも大きく強く見せる。

熊が怯んで背中を向けて去って行ってくれればいいが、立ち合わなくてはならないときもある。

準備ができるなら、ナイフを木に結び付け槍にして戦った方が、自分の間合いが長くなってよい。槍にできなければ仕方ない。ナイフで狙うなら、熊の体ではなく眼や

耳や鼻。そもそもナイフは熊の毛皮を簡単に突き刺すことはできないと思った方がいい。獣の皮膚はとにかく強靱なのだ。心臓を一突きすればよいが、強靱な毛皮と筋肉とあばら骨に守られているので容易ではない。

熊と戦うというのは、熊を殺すことが目的ではない。熊に人間は恐ろしい生き物だということとその体に教えてやればいいのだ。それがお互いのためなのだから。

⑥ 山から出る

前述したように、山で経験することは街でも応用が利く。しかし、街での経験は山で通用しないことが多い。このことは、どちらが本末かということを端的に示している。街での生活は便利だが、便利というのは、本来やらなくてはならないことを端折るということである。端折れることは効率がいいが、**大本を知っておく**ことは生き抜く上で大切なことだ。

原始に近づくにつれて、色々なものの見方が変わってくる。**身近にあるもの、自然にあるもので大概のことはできる**と実感できるようになる。「できる」と考えたら、「どうすればできるか」という思考になる。できるという前提に立てば、大概のことはできるのだ。知恵と工夫と意志で、自分が必要なものは自ら作り出す。それが本然たる心の在り方である。自分を出発点として、自分を広げていくのだ。

街では、必要なものはお金を出せば手に入る。ブランド、通販、百貨：。社会はそういうサービスで溢れている。食事だって、安くて美味しいものもあちこちにあるし、ウーバーで自宅に届けてもらえることも当たり前になった。

しかし、山や森ではそうはいかない。足りないものは知恵と工夫で自分で何とかするしかない。逆に言えば「**知恵と工夫を凝らして自分で用意する**」という習慣を身につけるにはいい機会だ。この「主体性・創造性を発揮する」という習慣は一生かけて上達していくものだ。私たち人間にとって「特別なもの」とは、ブランド品や限定品ではなく、当たり前だけど主体性・創造性を発揮するという習慣を身につけた自分の身体（心と体）のことなのである。

二泊三日のサバイバルでそれを実感した頃には、そろそろ街へ戻る時間が近づいている。出発前に打ち合わせた通り、あの国道まで友達に迎えに来てもらおう。帰り道は特に気を抜かないように。登る方が息は切れるが、降りる方が筋肉は消耗するし緊張が抜けるからケガをしやすい。そして蜂もいる。ミツバチは冬前が一番攻撃性がある。ま、スズメバチと違って刺されても腫れるだけなので、そんなに大ごとではないが。ただ、ミツバチの針には返しがついているので根本から引き抜くかナイフの端で針の部分を横から払い落とすようにしないとなかなか抜けない。毒は水に溶けやすい。

こうして無事に山から出たら、風呂風呂風呂！

もう、好きなものを飲み食いして笑って過ごすという生活を目指して日々を過ごすことは無くなるだろう。志義を見失った人間は、生活が便利になるほど墮落して手輕

で安全なスリルやエロ、グロ、ナンセンスを求めるようになる。

もし、薄っぺらい会話と、目に見えるところしか努力しなくなってきたら、体も精神もなまぐらになってきた兆候だ。そんな時は、またサバイバル・キャンプに出かけよう。さもないと、悪党たちにとっての極上のカモになってしまうカモ。

鷹は休んでいる時でも羽を鍛えることを止めないという。

今月も健康と健闘を。